

チベット文化伝承基地 ― 寺院 ―

講師 牛 黎涛

人類を文化によって分類したものが民族とよばれる。民族は独自の文化的個性、換言すれば言語や宗教、風俗・習慣などを共有する集団である。また、その文化を基礎とするどの集団に属しているかによって、アイデンティティが形成される。しかし、文化は、同じ人間という共通性に根ざした普遍性を持っており、我々が他の文化を理解する場合の土台となっている。

文化には、言語・宗教・学問・芸術などの精神文化、衣食住・機械・建造物・交通手段などの物質文化、社会生活を営むうえでの習慣や法制などの制度的文化が含まれる。

文化は、それぞれの地域環境にあわせながら、また、他民族との交流を通して作りだしたものであると定義される。

言うまでもなく、チベットはチベット文化の発祥地である。チベット族の人口の半分以上がチベットに住み、伝統的な文化風習を受け継いでいる。チベット文化を一言で表すなら、「南のインド文化と東の中国文化から影響を受けながら、仏教を中心にして展開した独自の文化」と定義できる。日本人の抱くチベットのイメージについて、「辺境、後進、密教、神秘といったイメージが強く、中国文化、インド文化と並んで、アジアを代表する文化の一つであるという認識がない」と、あるチベット学者は言う。はたして

チベット文化が「中国文化、インド文化と並ぶ文化」とまで言えるかは、学者の意見の分かれるところであるが、過去の歴史の中で、チベットの文化は周辺諸民族、とりわけモンゴル人に大きな影響を及ぼしてきた。その点においては、チベット文化が「アジアを代表する文化の一つ」であるのは間違いない。したがって、中央アジア及びそれ以东の民族と、その信仰なども検討しなければ、チベット文化の根源を見極めることはできないだろう。

本論文では指摘する「文化」の語には、教育を通じて得られたという意味での教養、文学、芸術と科学知識等の概念をも含む。ヨーロッパの言語における「文化」という言葉に「教育」という概念が含まれるようになったのは、以下に述べるように近代に入ってからである。

『文化』という言葉が最初にヨーロッパの言語に現れたとき、まだ今日の我々の与えた意味はなかった。『オックスフォード辞典』によると、一八〇五年まで、英語の中に『教育を通じて獲得できるもの』という意味も現れていなかった。M・アーノルドはその著作『文化と無政府』の中で、この意味を普及させ、更に『文化』という一つの言葉の最も一般的な使用法として今日までに残したのである。（夏克ほか『文化・歴史の投影』、上海人民出版社、1987、筆者訳）

一方、七世紀にチベット文字を創作したと伝えられるトシミ・サンポータの著作『文法論根本三十頌』の中に見い

だされるチベット語の「文化」(rig snas) という言葉は、チベット文化と教育に深い関係があることを我々に伝えている。これは、今日の我々が使用する「教育」という概念を含んだ「文化」という言葉に等しい。

チベットにおける「文化」という言葉が、「教育」という概念を含むようになった理由の一つとして、教育が仏教寺院において行われてきたことが考えられる。

教育は、遠い昔から文化を伝承するための中心的な役割を担っていた。教育は長い歴史のなかで文化を継承する土台であり、人々が新たな文化を創造する基点だったのである。また、寺院は、仏教徒にとって生活の中心地であり、経論の研修を行い、仏教教義の宣教、僧侶の養成をも目的としていた。同時に、完備された教育組織および仏教教理を策定し、人材を養成する場所であった。それゆえ、寺院は仏教がチベットで広く伝播するための基地であるとも言えるだろう。

本論文は、チベット文化を伝承する寺院教育の詳細と、寺院の概念、性質等を明らかにし、チベット文化に多大な影響を与えた寺院教育について述べることを目的としている。これは、正確にチベット文化を理解するための手助けとなるであろうし、また仏教教理、民衆の信仰にも適合する宗教政策を制定する手がかりともなるであろう。